



サステナブル・ツーリズムと インバウンド再興：持続可能な 北海道観光に向けて



池見 真由 (いけみ まゆ)

札幌国際大学観光学部教授

北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。青年海外協力隊（セネガル、村落開発普及員）、ロータリー財団国際親善奨学生（南アフリカ）、国際協力銀行専門調査員（南アフリカ）、北海道大学ルサカオフィス副所長（ザンビア）、同大学大学院経済学研究科助教を経て、現職。専門は開発経済学、国際協力論、地域研究。共編著に『サニテーションのしくみと共創』（2022年、北海道大学出版会）『サニテーションが生み出す物質的・経済的価値』（2023年、北海道大学出版会）。

1 持続可能な観光とインバウンドの重要性

国際社会が共通課題として目指す「持続可能な開発目標（SDGs）」が2015年9月に採択されて以降、さらに2019年12月より始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行（COVID-19パンデミック）を経て、観光を取り巻く状況は大きく変化しています。とりわけ持続可能な観光（サステナブル・ツーリズム）を推進する動きが世界各国で活発化しており、我が国日本も、外国人旅行者を積極的に呼び込む「観光立国」を掲げながら、

主要都市のみならず北海道のような国内地方へのインバウンド（外国人の訪日旅行または訪日する外国人旅行者）の誘致や、地域の魅力ある観光資源を発掘、創造、発信するための取り組みが進められています。国連世界観光機関（UNWTO）の定義によると、持続可能な観光とは、「訪問客、業界、環境および訪問客を受け入れるコミュニティのニーズに対応しつつ、現在および将来の経済、社会、環境への影響を十分に考慮する観光」を指します（UNWTO駐日事務所ホームページ）。日本では、特に過疎化や少子高齢化、伝統的な地場産業の衰退といった課題を抱える地方において、この持続可能な観光が、雇用機会の創出と流動人口の拡大による経済効果や、地域文化の継承と地元の特色ある自然・生活環境の保護といった社会効果を生み出すことが期待されています（前田 2019；池見 2023）。

そうした背景の中、2021年には「SDGsへの貢献と持続可能な観光の推進に係る取組方針」が、日本政府観光局（JNTO）によって策定されました。具体的には、海外向けにサステナブル・ツーリズムの推進に取り組む日本の各地域や観光コンテンツの魅力を紹介する情報発信、国籍や人種、民族、宗教、ジェンダー、障がいの有無などに関係なく全ての旅行者が日本で快適・安全・安心な旅行ができるような観光（ユニバーサル・ツーリズム）に資する情報提供などが示されています。これらの実践を通して、ポスト・コロナの時代に日本が世界の旅行者から選ばれる観光地となるための活動を遂行していくことが目指されています（JNTOホームページ）。日本でサステナブル・ツーリズムを実現するために、国内旅行者だけでなく海外からの外国人旅行者を積極的に取り込み、地域の保全と発展につなげるインバウンド戦略を考える重要性は、もはや必須となっているのが現状です。

2 訪日外国人旅行者数の推移

日本政府は、訪日外国人旅行者の飛躍的拡大のための戦略的な取り組みとして、2003年に「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を開始しました。さらに2006年には「観光立国推進基本法」が制定され、観光が21世紀における日本経済の重要な施策の柱として明確に位置付けられることとなりました。こうして2003年以降、訪日外国人旅行者数は、リーマン・ショックによる世

界的な経済危機に見舞われた2009年と、東日本大震災が起こった2011年は一時減少したものの、コロナ禍が始まる2019年までは増加の一途を辿っていました。図1は、2015年から2022年にかけての訪日外国人旅行者数の推移と各年の主な出来事を記したものです。2015年以前から堅調な右肩上がりの増加を維持していた傾向は、図1が示す通り、COVID-19パンデミックの勃発によって一気に激減しました。2020年の訪日外国人旅行者数は、3,000万人を超えていたコロナ禍前の2019年と比べて94%減、さらに2021年は99%減と過去最低を記録しています。しかし翌年の2022年は、海外からの入国制限による水際対策が大幅に緩和されるのに伴い、10月以降は顕著な回復傾向が見られます。直近の2023年データ（推計値）によれば、同年10月の訪日外国人数は252万人に達し、2019年同月数を超えました。さらに2023年1月～11月の累計数は2,233万人まで上昇し、コロナ禍以降初めて2,000万人を突破しました（JNTO 2023）。この数字は図1のグラフと照合すると、2022年の383万人から顕著な上昇であることが明白です。

一方、北海道を訪れる訪日外国人旅行者数の推移は（図2）、図1の日本全国の推移と異なる特徴が見て取れます。まず、2018年に起こった胆振東部地震の影響



図1 訪日外国人旅行者数の推移（2015年～2022年）
出典）日本政府観光局のデータおよび国土交通省北海道運輸局の資料を基に作成。



図2 訪日外国人来道者数の推移（2015年～2022年）
出典）北海道経済部観光局観光振興課のデータを基に作成。

により、翌年2019年の訪日外国人旅行者数は、全国としては増加を維持していたのと相反して北海道では減少しています。また、コロナ禍に入ると政府による水際対策の強化によって、2020年と2021年の北海道を訪れる外国人旅行者数は統計データ上0万人を記録しました。2022年は先述した通り大幅な対策緩和によって、北海道に外国人旅行客が69万人まで戻り始め、2023年以降もさらに急速な回復基調が見込まれています（北海道経済部観光局観光振興課 2023）。

3 訪日外国人旅行者数の国籍別動向

次に、訪日外国人旅行者の国籍を見ていきます。表1は、2019年の全国および北海道における国籍別訪日外国人旅行者数のトップ5を示しています。コロナ禍前の訪日外国人客数ピーク時であった2019年は、中国が約960万人、総数に占める割合は30.1%と最も多く、第2位は韓国、第3位は台湾、続けて第4位香港、第5位アメリカの順でした。北海道に限定した場合も、全国と同じく最も多いのが中国ですが、それ以下の順位は異なり、第2位台湾、第3位韓国、第4位タイ、第5位香港となっています。また、6位以下を含む全ての国籍に占めるアジア圏の割合は全国で84.1%、北海道で87.5%と非常に大きな割合を占めています（JNTOおよび北海道経済部観光局観光振興課データより）。

一方、コロナ禍後2022年の訪日外国人旅行者の国籍は表2の通りで、表1と比較して見るとコロナ禍前の傾向とは違った特徴が読み取れます。全国では第1位が韓国で約101万人、総数に占める割合は26.4%と、2位以下に大差をつけて多いことが分かります。第2位は台湾、第3位はアメリカ、第4位はベトナム、第

表1 2019年の国籍別訪日外国人旅行者数

《全国》

順位	国・地域名	人数(人)	割合(%)
1位	中国	9,594,394	30.1
2位	韓国	5,584,597	17.5
3位	台湾	4,890,602	15.3
4位	香港	2,290,792	7.2
5位	アメリカ	1,723,861	5.4

《北海道》

順位	国・地域名	人数(人)	割合(%)
1位	中国	594,000	24.3
2位	台湾	488,900	20.0
3位	韓国	436,900	17.9
4位	タイ	210,600	8.6
5位	香港	177,800	7.3

出典）日本政府観光局（JNTO）、国土交通省北海道運輸局、北海道経済部観光局観光振興課の資料を基に作成。

5位は香港の順となっています。北海道に限定した場合も、最も多いのが約22万人の韓国で31.6%を占めており、続く第2位の台湾も約13万人で19.4%と高い比率を占めています。アジア圏の割合としては、全国で78.3%、北海道では82.3%とコロナ禍以前より減少しており、原因として訪日中国人の激減や、アメリカなどアジア圏外からの訪日外国人の増加などが挙げられます。

さらに、国土交通省の2023年最新データによると、北海道観光のピークシーズンである7月～9月の外国人延べ宿泊者数は約147万人で、国籍別構成比は図3の通り、多い順に韓国31.3%、台湾24.1%、香港10.2%、中国7.6%、シンガポール4.0%となっています。上位3つは、表2の北海道が示す2022年時と変わらず順位も同じ国・地域で占めていますが、第4位は中国、第5位はシンガポールがランクインしており、両国から北海道を訪れる旅行者が前年より急増している動向が読み取れます（ちなみに表2の北海道で中国は第9位、シンガポールは第8位）。

表2 2022年の国籍別訪日外国人旅行者数

《全国》

順位	国・地域名	人数(人)	割合(%)
1位	韓国	1,012,751	26.4
2位	台湾	331,097	8.6
3位	アメリカ	323,513	8.4
4位	ベトナム	284,113	7.4
5位	香港	269,285	7.0

《北海道》

順位	国・地域名	人数(人)	割合(%)
1位	韓国	218,900	31.6
2位	台湾	134,400	19.4
3位	香港	67,800	9.8
4位	タイ	61,700	8.9
5位	アメリカ	36,600	5.3

出典) 日本政府観光局(JNTO)、国土交通省北海道運輸局、北海道経済部観光局観光振興課の資料を基に作成。

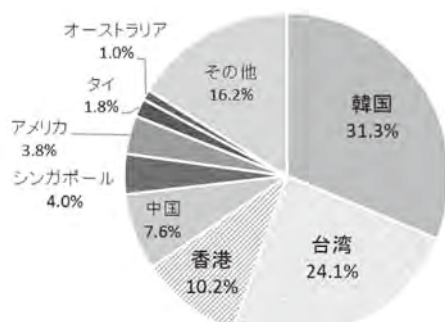


図3 北海道の外国人延べ宿泊者数の国籍別構成比(2023年7-9月)
出典) 国土交通省観光庁の宿泊旅行統計調査データおよび国土交通省北海道運輸局の資料を基に作成。

4 外国人目線で考える北海道観光の魅力と持続可能性

さまざまな国から来道される外国人旅行者または道内に滞在する在留外国人にとっての北海道の魅力やお勧めの場所(市町村、観光地など)、モノ(土産品、飲食など)、コト(体験、アクティビティなど)について把握すること、さらに外国人が道内を観光する上での問題点や課題を理解することは、将来的なインバウンド再興を通じた持続可能な北海道観光を検討する上で重要であると考えます。以上の問題関心に基づき、札幌国際大学観光学部および同大学大学院観光学研究科では、多国籍の外国人目線から見た北海道の観光資源に関する評価、認知度、満足度の実態を明らかにするための現地調査を行いました。筆者を含む調査を行った教員3名、学生28名の計31名のうち、日本人は15名、外国人は16名(中国、台湾、韓国、ベトナム、マレーシア、ネパール)と、調査実施者もまた多国籍で国際的な人材構成であったと言えます。そうした彼らが、2023年6月に北海道大学で開催された北大祭にて、11月に札幌国際大学の構内で、外国人留学生を対象に日本語および各国の多言語によるインタビューを行いました。さらに、12月に三井アウトレットパーク札幌北広島にて、外国人旅行者を対象に英語、韓国語、中国語の簡体字・繁体字の4言語によるウェブアンケートを実施しました。

北大で行ったインタビュー結果の幾つかをピックアップすると、まず、北海道の旅行目的や観光資源としての魅力に関しては、「自然が多くて奇麗」という自然景観が最も多く、それ以外にはグルメ、温泉、スキーなどのウィンタースポーツが挙げられました。外国人にお勧めの北海道のお土産については、白い恋人、ロイズ、六花亭などのお菓子が上位を占め、グルメに関しては、スープカレー、ラーメン、寿司の順で最も人気がありました。道内でお勧めの旅行先や観光地としては、札幌が最も多く、他には函館、小樽、登別が挙げられました。その他、道民に対する印象として、「優



北大祭での外国人留学生に対するインタビュー調査

しい」「フレンドリー」「親切」「気候は寒いけど人は温かい」といった好意的な意見が複数聞かれました。一方で道内観光における問題点としては、主に交通面での指摘が多く、札幌市内は交通の便が良いが、市外や道内を旅行する際には「公共交通機関が少ない」「車がなければ不便」「雪が大変」という声もありました。

三井アウトレットパークで調査を実施した際、ショッピングを楽しんでいた外国人客の多くが、団体観光バスで来られた台湾、香港、シンガポール人でした。この3つの国籍は図3が示す通り、同年北海道での外国人宿泊者数トップ5に入る国・地域です。しかし第1位の韓国人に関しては、パーク内で殆ど見当たらず、コロナ禍以前は道内各地の観光スポットやショッピングモールが韓国人団体客で賑わっていたのが、現在はほぼ姿を消したように見受けられます。来道する韓国人旅行者の観光形態が、団体旅行ではなく個人旅行（FIT）にシフトし、もはや主流であることが調査の現場からも確認されました。

ウェブアンケート結果で特筆すべき内容としては、まず日本の旅行経験に関して、今回の訪日が「3回目以上」と回答した人は全体の67%、さらに今回の来道経験も「3回目以上」と回答した人は20%もいることが分かり、リピーターの多さが顕著に表れていました。また、北海道観光で期待していることや主な旅行目的として、突出して最も多いのがやはり自然景観で、続いてグルメ、温泉、ショッピングも人気がありました。「今度また北海道を訪れたいと思いますか」という質問に対しては、「非常に思う」「思う」の回答で100%を占めていたことから、外国人旅行者の北海道に対する印象の良さや、道内旅行を通してさまざまな体験や物見遊山による満足度の高さが伺えました。他方、2021年7月に「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコの世界文化遺産に登録されたことを受けて、道内で新たに注目を浴びる貴重な観光資源として期待されている観点から、外国人旅行者の認知度について質問した



三井アウトレットパーク札幌北広島での外国人旅行者に対するウェブアンケート調査

ところ、回答者の1名を除く全員がこの事実や存在を「知らない」ことが分かりました。しかし、「旅行する際に遺跡や博物館を観光の目的地にすることがありますか」という質問に対しては、回答者の53%が「たまにある」、23%が「よくある」とのことでした。北海道に点在する世界遺産の縄文遺跡やその所在地・関連施設を、魅力ある観光地や観光資源として活用し、認知度の拡大や多言語対応の向上などによって、国内の日本人客だけでなく海外の外国人客を呼び込める可能性を、今後模索していく価値は十分にあると言えます。

以上より、サステイナブル・ツーリズムを実現する一手段としてインバウンドの誘致拡大を図るためには、外国人目線で考える視点と、地域の自然環境や生活文化の保全・活用に取り組む姿勢が必要であり、その担い手として地元住民、とりわけ地域の現在と未来の活性化を担う若者世代の活躍が求められます（池見2021）。今回調査を行った学生たちのように、より多くの若者が北海道で出会う外国人と積極的に触れ合い、共創しながら持続可能な社会を目指して取り組むことが望まれます。また、「外国人」と一括りにせず国籍ごとの違いや特徴を理解し尊重すること、そして、訪日外国人旅行者それぞれに適した対応の仕方ができ、配慮できる道民が育つことが、北海道観光の持続可能な発展につながると考えます。さらに、国際交流や異文化理解のための実践的なコミュニケーション能力を養うことで、インバウンド再興が重要な鍵の一つとなるサステイナブル・ツーリズムに資する人材の育成につながっていくことも期待したいと思います。

参考文献・資料

- ・池見真由（2021）「北海道の水・農業・歴史文化・観という地域資源を活かした共創と教育効果」『開発こうほう』北海道開発協会、2021年5月号、p.16-19。
- ・池見真由（2023）「北海道におけるSDGsと観光の共創」『調査ニュース』北海道銀行、第454号、p.8-11。
- ・国土交通省観光庁「統計情報・白書：宿泊旅行統計調査」<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/shukuhakutoukei.html>（2024年1月5日最終閲覧）
- ・国土交通省北海道運輸局（2023）『北海道の観光基礎データ』国土交通省。
- ・日本政府観光局（JNTO）（2023）「訪日外客数（2023年11月推計値）」『PRESS RELEASE』2023年12月20日、JNTO。
- ・日本政府観光局（JNTO）ホームページ「SDGs達成に向けた取り組み」<https://www.jnto.go.jp/about-us/sdgs.html>（2024年1月5日最終閲覧）。
- ・北海道経済部観光局観光振興課「北海道観光入込客数の推移」<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/irikominosui.html>（2024年1月5日最終閲覧）
- ・前田武彦（2019）「SDGsにおける持続可能な観光の可能性」『環境技術』第48巻第5号、p.260-264。
- ・UNWTO駐日事務所ホームページ「持続可能な観光の定義」<https://unwto-ap.org/why/tourism-definition/>（2024年1月9日最終閲覧）。